

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

あとかき

URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001938/
-----	---



あとかき

ソ連時代のロシアの詩人エフトゥシェンコの詩に「ロシアの詩人は詩人以上のものだ」(*Поэт в России – больше, чем поэт*) という表現がある。ロシア語、そして広くスラヴ語におけるアспект (ロシア語学、スラヴ語学で言うところの「体 vid」) もまた、アспект以上のものなのではないかと思いたくなるほど、スラヴ語における体はそれが文法カテゴリーであることもあり、言語の文法体系全体の中でも重要な位置を占める。だからこそ隣接する分野は多岐に渡り、諸カテゴリーとの相関性も多層で複雑なものとなる。アспектを研究対象にしている以上、心の平安は無い。研究以外の場面でも、動作の提示のし方についてアспект的関心を持ってしまう。

例えば、オーステン・ダール (Östen DAHL) の 1974 年の論文に以下のような例文が出てくる。

John was solving the problem of the semantics of aspects in Russian when I shot him dead.

この例文を読みながら、*solve the problem* の動詞句が限界性を持っていて、ジョンは私に撃たれなかったら、きっとこの問題を解いていただろうに、と見込まれていた限界点への到達をなし得なかったジョンに心を寄せる。

ローラ・ヤンダ (Laura JANDA) は 2004 年にルーヴェン・カトリック大学で開催された国際会議「スラヴ語学の展望」の基調講演者の一人だったが、次のような意味のことを言われた。

I always tell my graduate students: 'Do not say that you are writing a dissertation because you have to finish writing it! Instead, say you are working on it! Then you cannot lie if you fail in writing it!'

論文の執筆が上手いかわないと、「論文を書く」という過程には、事の自然な成り行きで進めば、必ず終了限界に到達するはず、つまり書き終わるはず、と自己を奮い立たせる。ただ、『ケジメのない日本語』(影山太郎著、岩波書店、2002) を母語とする私が「論文を書く」場合も、終了限界への到達はちゃんと内包されているのだろうか、と不安になったりもする。そして幸か不幸か、「研究をする」には終了限界が見込まれていない。

(金子 百合子)